

# 前方後円墳成立の歴史的意義

—「邪馬台国時代」における首長と農民層の共同幻想—

広瀬和雄（奈良女子大学）

## 1 前方後円墳研究をめぐる現状と課題

膨大な考古資料があらゆる時代・分野に蓄積され、なかば自然発生的に研究は細分化・個別化・専門化の一途をたどっている。前方後円墳の研究とても例外ではない。それを構成している個々の要素の研究は百花繚乱だ。いっぽう、前方後円墳の造営や系譜にあらわされた政治関係の追究は依然として、この分野の主流を占めつづけている。

前方後円墳はその希少性・隔絶性などから、地域首長の墳墓だということは動かないが、先験的に政治関係を説くのは正しくない。なぜ、日本列島の長い歴史のなかで400年前後の古墳時代だけ、墳墓に特定の政治関係が貫徹されたのか。わが国の前方後円墳から抽象できる基本的な属性は、『祭祀』『政治』『墓制』。＜祭祀と政治が媒介された墓制が前方後円墳である＞と概念づければ、祭祀と政治が墓制に表出されてくる過程の論究が、前方後円墳造営の解明につながっていく。ここでは前方後円墳に表現された祭祀とは何かを考えてみよう。

前方後円墳の造営に関しては、『前方後円墳では首長霊継承儀礼が実施された、それは首長権継承儀式でもあった』という解釈が定説化している。つまり、『首長権は亡き首長の霊性によって保証されていた』というものだ。しかし、霊威が継承されるためには、独立的存在としての霊魂が、首長の肉体から遊離していることが不可欠だ。つまり、『霊肉分離の観念』が成立していなければならないが、考古学的事実に基づくかぎりそれは認めがたい。

## 2 初期前方後円墳に表された埋葬観念

3世紀後半～4世紀前半ごろの、初期前方後円墳の特徴は次のとおり。①正円形をした高い後円部②割竹形木棺を竪穴式石槨で囲み、その上部を粘土で被覆し、排水溝を完備した埋葬施設③中国鏡・鉄製武器・農工具・碧玉製腕飾り類・装身具などの副葬品。土器などの生活容器類がまったくないことに注意。こうした事実から、第1に亡き首長の遺骸を密閉して肉体の保持をはかり、その空間を一定期間、顕彰しつづける、第2に生前の首長権力の維持に必要な品々を再び機能させる、第3に遺骸の埋葬空間を天空に接近させよう、といった意志の働きが読みとれる。

遺骸保護や密閉の装置は、霊肉分離の観念と矛盾をきたす。まして、抜け殻となった遺骸に副葬された品々は無縁であろう。副葬品には一定の意味が付与され、効果が期待されていたはずだ。中国鏡には神仙思想に基づく不死の観念と中国王朝の権威の後ろ盾が、鉄製武器には他共同体からの防衛力が、鉄製農工具は耕地開発や稲作のために、というふうな。それらは首長が共同体の再生産を担っていくための重要な道具だったが、死後にも必

要とされるのは、亡き首長に生前と同じような役割が期待されていた、もしくは力の発動の期待、といった観念があったからだろう。

なお、亡き首長の葬儀は1回かぎりのものであったはずだが、前方後円墳が成立してからの変化、つまり後円部3段目の巨大化、円筒埴輪列や楕形・蓋形埴輪の樹立といった行為は、遺骸空間である後円部を人びとに示威し顕彰することと密接な関係をもつ。前方後円墳の中でもことに後円部は特別な場であった。

### 3 東アジアの中の前方後円墳

前方後円墳をはじめとしたわが国の古墳と、東アジアにおける他地域の古墳とでは、墳丘、埋葬施設、土器・陶器類の副葬の3点が決定的に異なる。それらは霊肉分離の観念が成立しているかどうか、に大きく関わる。

後漢・魏晋墓は地下深く設けられた墓室に、死者の霊魂がかつての地上生活ができるように、多種多量の副葬品を納めている。土器・陶器・漆器などの食器・容器類は地下世界の必需品であった。上位階層の墓室には、生前の墓主の生活ぶりなどを描いた壁画や画像石などで室内が飾られていたが、それも墓主の霊魂のための営為であった。

4～5世紀の高句麗古墳は横穴式石室と方墳の組み合わせが基本であった。墳丘の大小はあってもさほど較差は大きくない。副葬品の全貌はあきらかでないが、金冠や馬具などのほかに、土器・陶器類の食器類が必須であった。新羅・百済では4世紀後半ないし末になってから、伽耶は5世紀中ごろになって墳丘が形成される。百済の当初は方墳もあったし、新羅には一部双円墳が見られたが、基本的には伽耶も含めいずれも円墳だ。葺石・埴輪・周濠などの外部表飾は一部を除くと見当たらない。わが国のような、墳形・規模・外表施設などがあいまって、古墳が一定の階層秩序を示すということは認めがたい。

新羅古墳の埋葬施設の積石木槨は密閉性が高いが、冠・帯金具・指輪・沓などの金製装身具をはじめ、鉄製武器や馬具のほか、金銀器や陶質土器の食器類などが多量副葬されている。百済古墳のほとんどは横穴式石室を埋葬施設とし、陶器や陶質土器などの食器類を副葬する。伽耶では3世紀から5世紀前半ごろまでは木槨が一般的で、やがて竪穴石槨に移行し、鉄製武器・馬具・多量の鉄素材のほかに陶質土器の食器類を多量副葬している。朝鮮三国時代の古墳は食器類を副葬していたが、漢墓・魏晋墓のような楼閣・井戸・便所・竈などの明器は伴わない。そして、わが国の前期古墳に顕著であった宝器的な製品も見当たらなかった。

### 4 弥生墳丘墓とカミ観念の変遷

弥生時代後期後半ごろ、吉備・出雲・讃岐・阿波・播磨・大和・尾張・越前・上総など列島各地で、民衆墓とは隔絶した首長墓（墳丘墓）が造営されはじめる。墳丘墓の特徴は次のとおり。①生活域や生産域が眼下に望め、逆にそれらから墳丘墓を見上げられる低い丘陵に立地②円形・方形や突出部の付いた円形・方形の墳丘③木槨・竪穴式石槨などの埋葬施設、水銀朱も使用④中国鏡・鉄製武器・装身具などの副葬品⑤特殊器台や高坏・壺などの供献土器。前方後円墳の先駆となった墳丘墓は、遺骸を手厚く葬り、埋葬終了後には墳頂部で神人共食儀礼を実施していた。

各地の墳丘墓と前方後円墳の間には、諸要素の統合といった連続性だけではなく、飛躍を伴う不連続性も見られる。古代中国思想の活用が飛躍の内容だが、一つは「天円地方」の思想を体現した前方後円形である。古代中国では天（円）にはカミが、地（方）には人が住まっていたから、それから類推すれば前方後円墳の後円部にはカミが座していた。いま一つは碧玉製腕飾り類などの石製品だが、これは漢墓などに見られた玉（ぎょく）を模倣したものであろう。玉は神的エネルギーの拠り所であった。

弥生時代のカミ観念の変化は次のとおり。前期末から登場した弥生時代の神殿（独立棟持柱をもった高床建物）は、当初から首長との関わりがよかったが、後期後半ごろになって首長居宅に取り込まれる。神殿とカミを首長が管理するようになった。ただ、首長の死に伴ってだろうが、居宅も神殿も共に一代かぎりしか存続していない。したがって首長の死と運命と共にした「属人神」の段階であった。しかし、農耕共同体の繁栄を約束してくれるカミが断絶しては、その再生産に大いなる支障をきたす。当然、新しい首長とカミの関係が、新規に建設された神殿で展開したに違いない。

首長の交代ごとにカミの死と再生のドラマが演じられた。こうした状況下において、豊穡を実現してきたかつての首長とカミの組み合わせを、共同体の繁栄のために存続させたいといった観念が、共同体のなかに醸成されてきても不思議ではない。ただそれは、亡き首長の靈魂が次代の首長に乗り移って継承されつづけるのだ、ということではなかった。亡き首長がそのままカミに昇華することであった。つまり、《亡き首長はカミとなって共同体を守護する》という観念が形成されたのだ。

## 5 前方後円墳の思想的基盤

弥生墳丘墓は《死した首長はカミとなって共同体を見守ってくれる》という、共同幻想の体現物だった。だから、亡き首長の遺骸はいつまでも肉体として保持され、そこに靈魂が宿っていなければならなかった。木棺を竪穴式石槨で覆うのはここに起因している。そして、遺骸にカミが憑依して亡き首長はカミとなって蘇った。墳丘墓では《死と再生のドラマ》が演じられていたのだ。それは第1義的には農耕共同体における首長と農民層の間に形成された共同幻想であった。

しかし、各首長は《もの・人・情報のネットワーク》に参画し、一定地域において首長同盟としての支配共同体を形成していたから、亡き首長がカミに昇華していく儀礼は同時に、政治同盟の更新儀式でもあった。首長の死に伴う次代の首長の参入、新しい支配共同体の更新、それが各地の墳丘墓に墳形・列石や貼石・特殊器台の使用といった共通性をもたらした原因であった。

やがて各地の首長同盟の上位に立った大和政権は、墳丘墓を統合し、中国思想を吸収して前方後円墳を創出した。大和政権は各地の農耕共同体に形成されていた共同幻想を止揚し、大王を頂点とした列島規模での支配共同体の共同幻想にまで高めた。それは亡き首長＝カミの威力は、偉大なる大和政権のカミからの序列によって保証される、という関係であった。

現実社会における首長の権力―農耕と交通とを媒介とした共同体の再生産を保証し、他共同体との抗争に際しては成員を統括一と、観念上の亡き首長の権力―現実の権力で解決

できない不可知のできごとへの対処の方法を提示—という、共同体再生産にとって二重の権力が発動されることで、二つの共同体の安定的な運行が保たれた。現実の社会において威力を発揮した首長は、死してもなおその活力が維持されつづけると観念されていた。また、そうした二重権力が発動しないと共同体の再生産が維持されない、という共同観念があった。首長は生きているときも死んでからも、共同体成員の求心力の源泉であった。

図出典

- ①宮内庁書陵部
- ②雪野山古墳発掘調査団『雪野山古墳の研究』（1996）
- ③堅田直『池田茶臼山古墳の研究』（1964）
- ④⑤⑥⑦池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会『弥生の環濠都市と巨大神殿』（1996）
- ⑧福島県立博物館『会津大塚山古墳の時代』（1994）



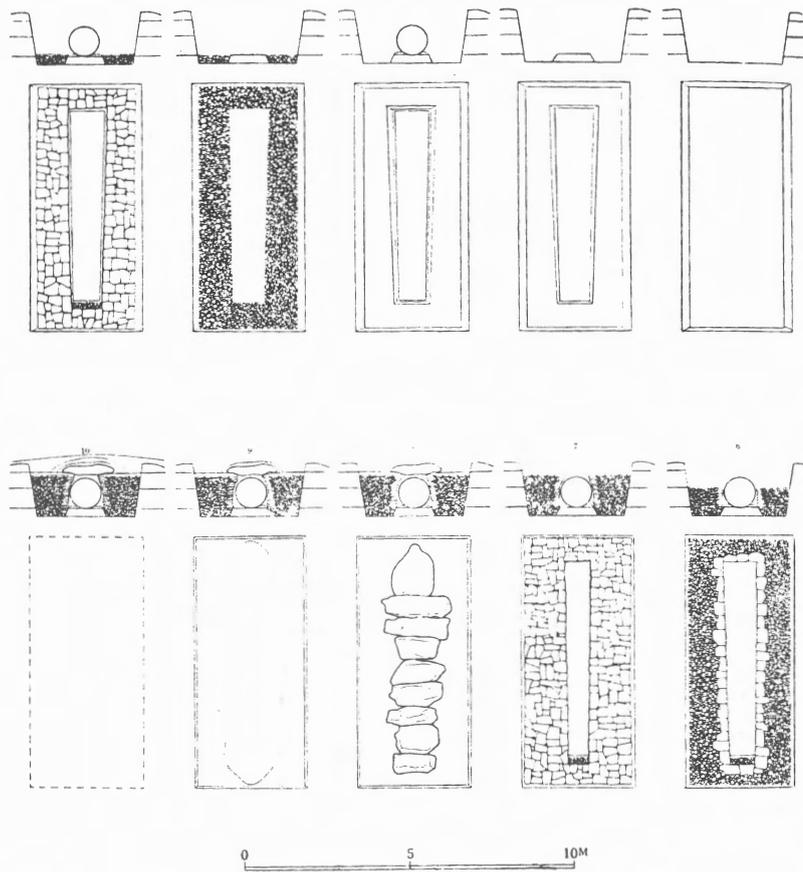


図3 大阪府池田茶臼山古墳（縦穴式石槨の構築過程）

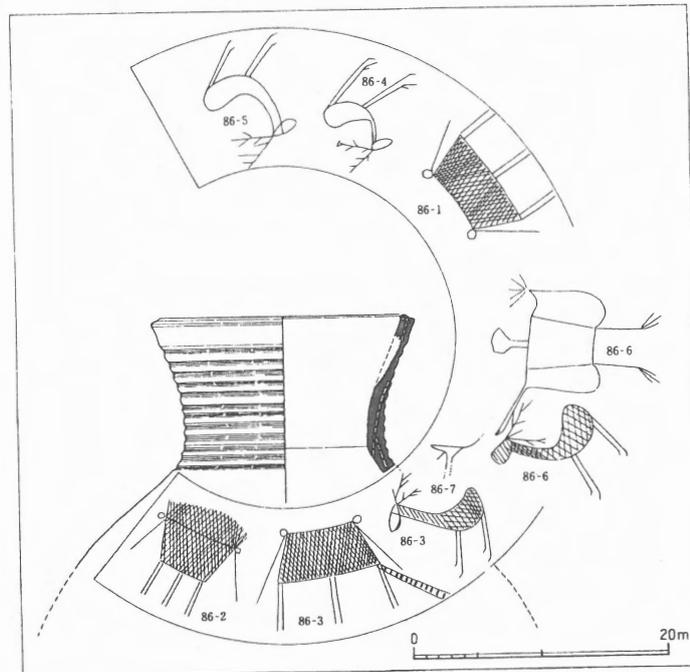


図4 兵庫県久山前地遺跡（絵画土器）

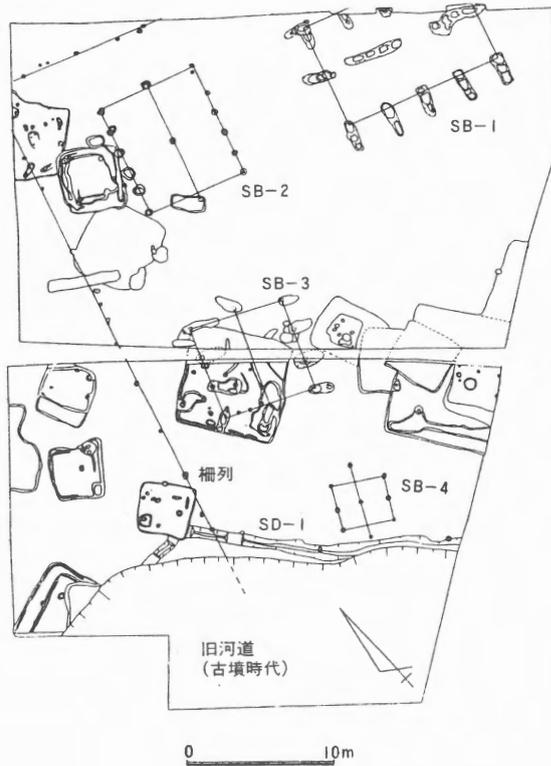


図6 滋賀県伊勢遺跡  
(SB4が神殿)



図5 兵庫県楠・荒田町遺跡  
(SB09が「神殿」)

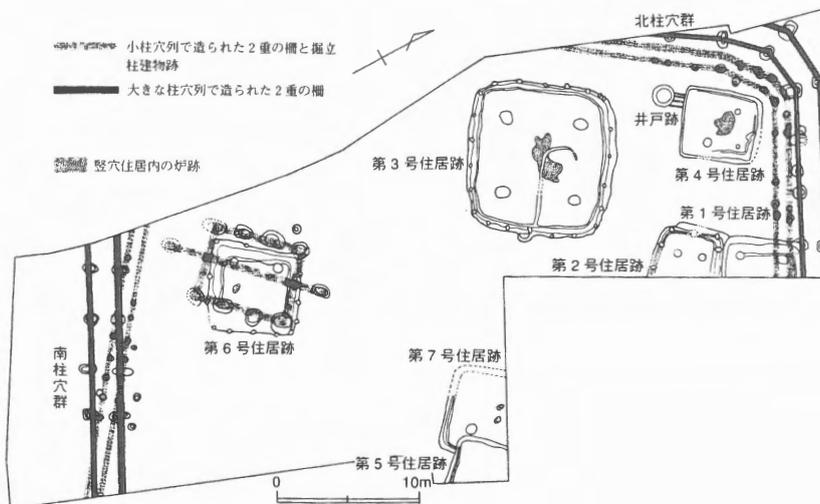


図7 福島県菅俣B遺跡  
(第6号住居跡が神殿)

